

2023 05

大好き～好きなものは好き。

紫陽花の季節。

日曜画家だった母が好んで描いた花だ。
決して上手くはなかったけど。

母を疎ましく思っていた頃には、紫陽花を好きになれなかったけど、この頃は素直にキレイだ、イイナと思うようになった…。

この春は新作『Pascals (パスカルズ) ～しあわせのようなもの～』の上映と、次回作『大好き～奈緒ちゃんとお母さんの50年～』の制作資金集めのための上映会に、夢中になって取り組んでいた。

映像の仕事を始めてから50年、いつだって夢中だったから、ずっと夢の中を突っ走っているような人生だ。

新作『Pascals』はひよんなことから創ることになった音楽ライブドキュメンタリー。「パスカルズ」は知る人ぞ知るというグループで、いいんだなあ、これが…。

音楽の魅力を言葉で伝えるのは、とても難しい。映画の魅力を言葉で伝えるのが難しいのと同様に。映画のパンフレットに掲載させてもらった、尾上文さん（詩人）の文章（抜粋）を紹介しよう。

「パスカルズの音楽は僕には、生きることへの賛歌に聴こえる。この世界に生まれ生きる誰もが、喜びとともに生きる権利をもっているし、いいところも、悪いところも、欠点もクセも、うぬぼれも自信のなさも含めて、ひとつの命はたったひとつだ。

たったひとつの命だから、たったひとつの命である他人の一生を尊重できる。

〈中略〉

パスカルズは14人の個人がひとりひとり他の13人の生を尊重することで成り立っているバンドだ。」

公開中の映画のトークショーでメンバーの一人が、自分達のライブドキュメンタリーを観終わって、開口一番「パスカルズってイイナ、好きだな…と思いました」と言ってくれたのが、とても嬉しかった。

客観的になり過ぎず、自分達のこと、自分自身のことを受け止めているのが、気持ちがいい。「好き」を突き詰めて、どこまでもどこまでも「好き」になって、「大好き」になって、はじめて自分らしい作品が生まれるのだ、と思うから。

で、次回作のタイトルは『大好き』。

1995年、パスカルズ結成の年に私は、自主製作・自主上映の長編処女作『奈緒ちゃん』を完成させた。てんかんと知的障がいをお互い持つ、姉の長女、奈緒ちゃんを主人公にしたドキュメンタリー「奈緒ちゃんシリーズ」は以来、4本の作品になり、今尚41年目の撮影が続いている。

「長くは生きられないと言われていた

奈緒ちゃんが50歳になります。

奈緒ちゃんが家族に地域に生まれ、
家族を地域を育んだ年月…」

次回作のキーワードは「大好き」だ、と思ひ至り、映画が出来る前からタイトルが浮かんでしまったんだ。

「大好き」という思いの主人公は、奈緒ちゃんであり、奈緒ちゃんを取り巻く家族や地域の人々であり、私をはじめとする映画の創り手でもある。そして、映画を観る一人ひとりもまた、「大好き」という思いを共有する存在だと思う。

この春から次回作『大好き』の製作・上映のためのカンパを募っている。図々しいお願いに違いないが、「大好き」と言うキーワードに賛同する一人でも多くの方々に、映画創りにかかわってもらえたら、という思いなのだ…。

力になってほしい。

完成は来年の春の予定。

夢中になって、夢の中を突っ走ってきた映画創りが、今「大好き」という素直な想いに辿り着こうとしている。

大好き～好きなものは好き。

伊勢 真一